

【1】高島プログラムに基づく具体的な取組

(1) 共同授業研究システムについて

これまで小中教員による教科別部会で研究を進め、9年間の教科のつながりを学んできた。今年度は、学習方法を工夫することにより「主体的、対話的で深い学び」を目指すというスタイルに変換し、教職員がより広い視野をもつことをねらった。4つの部会（下記）は、どの部会も小中の教員からなり、教科の枠をはずして学びの研究を進めた。

グループワーク部会・思考ツール部会
チームティーチング部会・ICT部会

それぞれの部会で授業づくりと授業研究をするだけでなく、他部会の授業を参観し合同部会での研究会も行い、成果や課題を共有できる研究体制にした。滋賀大学の辻先生、狩野先生にも授業研究や研修において指導助言を受けた。



(2) 小学校の教科担任制について

《中学校教員による専科指導》【外国語】



子どもたちのコミュニケーション能力を向上させるため、中学校の英語科教員が中心となり、様々な授業の工夫を試みた。身近な教員の登場するビデオなどを自作し、聞き取りやクイズをしたり、高島市の地図から建物の数を数えさせたりと、子どもの関心を大切に、楽しく活発にコミュニケーションが図れる外国語学習を進めた。専科教員はもちろん、ALTや小学校担任も臨機応変に英語で例を示すなど、英語の環境が整った教室を目指した。

【音楽科・体育科】

6年生の音楽科は、中学校の音楽室で中学校教員が指導した。また、5、6年生体育科は、小学校担任と中学校教員とのチームティーチングで指導した。専門的な技術指導に加え、教科の特性を生かした「考え方を育む学習」を取り入れ、児童の学習意欲が高まった。専門的で具体的な指導は、児童の変容を生み、小学校教員も指導法を学ぶOJTの機会とすることができた。



《小学校教員が中学校教員と連携した専科指導》

【算数科（小中連携事業）】

教科担任は、ICTを生かし、全体での学習をリードした。一方担任は、少数派の意見を取り上げるなど話し合いのサポートや児童の支援をした。また、推進会議には中学校数学科教員も参加し、小中のつながりについても話し合った。

(3) 学習環境づくりに向けた取組について

学園で統一した『学びの約束』を基に4月当初のステージ会議で、ステージ毎の重点を決めて、学習規律や学習環境づくりに努めた。

第1ステージ：学年に合った「話す」「聞く」のポイントを掲示。ペアやグループの聴き合いを積極的に入れた。「考えをつなぐ言葉」を活用させる。返事、言葉遣い、呼び方のきまりを守らせた。

第2ステージ：授業はじめと終わりの集中。ペアやグループで聴き合う習慣づくりをする。

第3ステージ：4人グループで役割分担して話す習慣づくりをする。

【2】平成30年度高島中学校区の「NEXT ONE」

(1) 特色ある取組

キャリア教育を意識したステージ活動

《第1ステージ…1, 2, 3, 4年》

6月の「ミニ集会」11月の「ちびっ子フェスティバル」とすべての4年生がリーダーを体験した。1～4年生の子どもたちが互いに認め合い、協力することを大切にしてきた。

《第2ステージ…5, 6, 7年》

縦割り班で市内の事業所や施設、店などを訪問する「My city 高島」(写真は“びれっじ”)では、訪問先を<歴史><食><産業>などの分野に分類し、関心を大切にしながらグループ編成をした。5年生〔高島の良さから自分の関心や課題を見つける〕6年生〔その関心から視野を広げ未来の高島への思いを持つ〕7年生〔高島をよくするアイデアを発信したり、人の生き方に触れたりする〕というように段階的なねらいを設定した。



《第3ステージ…8, 9年》

『先輩に学ぶ学習』では、市内の職業人3人(理容師・消防士・町おこし隊)から話を聞き、生き方を学んだ。「夢が決まると、必死で勉強した」「何かのきっかけで、人生が開ける」などの話に耳を傾け、自分の生き方を見つめなおす契機となった。

地域とつながる学習や活動

地域のボランティア活動が、様々な学年、教科に広がってきた。小学校では、『九九道場』『昔遊びチャレンジ』に新たな試みとして『わり算道場』を加えた。「図書ボランティア」や「ミシンボランティア」も改善しつつ継続した。中学校では、『全校自然体験(蛇谷ヶ峰登山)』に多くのボランティアが参加し、安全で充実した体験活動ができた。『大溝祭り・高島夏祭りへの参加』が地域貢献につながった。今年度は、活動の写真と子どもたちやボランティアの感想を、校内や公民館に掲示し、小中一貫だより『つながり』で意識的に取り上げるなど、地域への発信にも努めた。



(2) 成果と課題

- ①共同授業研究の部会を工夫したことで、教員の視野が広がり研究に対する意識が高まった。研究会の形態も2部会合同やワールドカフェ方式での交流など、教員同士が効率的に学び合えた。
- ②各ステージでつきたい力を明確に意識できた。特に第1ステージは、活動を大きく変革して2年目となり、その効果について検証すべきであろう。第2、3ステージは、キャリア教育的な要素を意識して取り組めた。一人ひとりの学習課題を追求し学習が繋がっていくようにしなければならない。
- ③小中をつなぐ小中交流活動、中学校体験などは、毎年の慣例にとどまらぬよう一つひとつその意義を検討しながら実施した。特に中学校体験では、中学校教員による一日体験授業により、「小学校で習ったことが中学校の学習につながることを実感できる良い機会であった。
- ④地域の人の参画による学習や活動を何度も取り入れることで、地域の人が格式張らず、生き生きと活躍する姿が多くみられた。また、教員も地域連携に良さを感じるようになってきた。

【3】次年度の構想

市のアンケートによると、(例えば算数数学で)「授業はよくわかる」は比較的高いのに対し、「学習が好き」という項目は低かった。これは、教師が「わかる授業」に重点を置き、子ども主体の学習がまだまだ不十分であることを表す。「わかる授業+自分で考えて達成感のある授業」を各教科で実現していかなければならない。他にも、中学校授業への関心(6年生)や地域参加の意欲、話し合い活動への手ごたえなども高いので、このエネルギーを生かしていきたい。

教職員のアンケートは、ほとんどの項目で高い値であるが、「小中一貫教育が自尊感情や学習意欲を高めているか」に関しては、やや低い値である。このことは児童生徒のアンケート結果に対応している。つまり、本学園の児童生徒につきたい力の重点は、『日々の生活や学習に対する活力』であると考えられる。そのために、次年度の小中一貫教育では、次のことに重点を置く。

- 学園研究会では、“子どもが思いを積み重ね、達成感をもって学ぶ”ことを共通の努力目標とし『道徳科』を研究の窓口にして他教科にも応用できるよう視野を広げる。(仮)
- 生徒指導、教育相談、人権教育など子ども理解に関する小中のつながりを大切にする。
- 小中連携によるステージ活動や地域連携活動をキャリア教育の視点で再編成する。